

# Pa ca kka logia

Written by kuko.

## Prologue

---

ムシ暑くまとわりついてくる空気の膜が、知れず頭の奥の方を溶かしていた。どろどろに溶けた脳ミソは、ともすれば肉を焼く匂いが生々しい焼肉屋の、テーブルに並べられたホルモンみたいに旨そうに思えた。遠くのビルが陽炎に揺れているのを鳩みたいに見つめながら、帰路を急ぐ急行の列車はもくもく走る。車体が揺れた拍子に、図らずも隣に立つ人の後頭部に肘をぶつける。その一瞬に垣間見えた、向こうに座り眠る女の、半袖から浅ましく垂れ出たはみ肉。それを焼く空想でしばし苛立ちは紛れた。

ああ、そうだ、明日は焼き肉を食べよう。

でも、その前に今日の晩御飯が最優先事項である。ユーウツだなあ、とため息は嘆いた。お腹は空いているはずなのに、車内に充満する不快度指数が食欲を打ち消している。作る気はすでに失せて、さっそう彼女の足は出来合いものを買いに行く心積もりだ。

駅を上がってすぐの角を曲がると、スタジアムに続く複雑な路地に、伝統的な並びを守って個人商店が陳列している。その大半が中華料理店だが、たまの店先にはチャイナドレスが引っ掛けていたりする。日本有数のチャイナタウンだ。少し広い通りに出れば、商店街でいうところのアーチみたいに、いかにも恭しく鳥居が建っているし、奥まった方には社も点在している。けれども、ここで育った愛（めぐみ）にとっては、単なる商店街と言って相違ない。ましてやこんな雨降る平日の夕方ならば、観光客の数もそぞろな、ただの中国人街である。傘を並べて歩く客より、店先の品物を気にかけているおばさんの方がいくらか目に留まる。

ここにあるもので目新しいことは何もないけれど、愛はこの横浜での生活に飽き飽きしたことは一度もない。たまの休日に賑わう街を見ることがあれば、こうして閑散とした（良く言えば、すごく落ち着いた）街の表情もまた一興だ。絶えず変化する環境の流れに関しては、ここはその速度がとても緩やかだと思う。それはたぶん、ずっと昔の建物が、ことさら主張も引け目を感じることもせずに、丁度よく混在している街並みが物語る通りなのだ。外側からの刺激を甘受しつつも、新しいコトやモノをひたすら陳列するのではなく、自分に合うように変換してからゆっくり慣らしていく作業を繰り返すのだ。

さて、夕飯は何にしようかと選択肢を思いめぐらして、肩掛けの鞆から携帯電話を取り出した。最も慣れた手つきでメモリを探し、通話ボタンを押す。寝てるかもしれないとも思ったが、当人だってお腹は空いている頃合いだろう。変なところで優柔不断な彼女は、しばしば決定を彼に委ねる。その前に選択肢を彼女好みに絞っておくことは忘れない、が――。

数回のコールのあと、「はい」と応じたその声に、無意識に表情が緩む。チマキと、水餃子と、肉まん、シュウマイと...今日の夕飯は何がいい？ 本日の料理当番をサボタージュする気満々の彼女の電話に、スピーカーの向こうで苦笑を洩らす声が聞こえた。

## Andante

---

夕飯には、買ってきたチマキと、インスタントパッケージの青椒肉絲を作って食べた。食器を洗う彼の細身の背中を見つめながら、愛はグラスを傾ける。からり、と透明な容器の中で揺れた氷は、外気の温かさに触れて静かに融解し、そしてまた、グラスを持つ彼女の指先を濡らした。母が漬けた梅酒を晩酌するのが近頃の日課になっている。彼はたびたびその晩酌に付き合ってくれるが、生来のマイペースさゆえに落ち着いて酒を傾けるということがあまりない。洗い物なんて飲んだ後だっていいじゃないか、と思う愛の大雑把ぶりとは反対に、気にかかったら行動しないと気が済まない性質なのである。そのくせ、双方几帳面とは到底言い難く、愛は見ての通りのアバウト主義であり、彼は関心のないものに対しては極めて適当な価値観をもった人であった。

互いに今年で29を数え、三十路リーチが頭の中で華やかなファンファーレを鳴らしている。全くと言っていいほど面識のなかった二人であったが、24歳のときに知り合っただけですぐ交際がスタートした。好都合だった、というのが正直な理由かもしれない。特別な事情とか間柄とか、そういうものが一切ない真っ白な二人だったからこそ、気取らずにありのままの自分たちを表現できた。綺麗な恋人を演じたい年頃でもなくなっていたから、その出逢いはすごく自然に二人の中で始まっていたのだと、後になって気付く。そうこうしているうち、あっという間に5年の歳月は黙々と流れた。

「今日のチマキさ、あれすごく美味しかったよね。どこで買ってきたの？」

「入口のこの、いつもは肉まんを買ってきてるところ」

「ああ、あそこか。僕も今度の料理当番のとき買ってこよっかな」

「悠ちゃんはお料理上手だから、だめ」

生活の部分に関して言えば、20代前半の頃に比べて随分と落ち着いてきている。けれど、その一方で、別の焦燥感が年齢とともに重く増してきていることが、愛にとって気がかりでならない。そう、言ってみればそれが、彼女にとって最近で一番の悩みごとなのである。

「ねえ、悠ちゃん。そろそろこっち来て一緒に飲んでよ」

はいはい、と悠は緑のエプロンを頭から通して外し、丁寧に折りたたんでダイニングチェアの背もたれに掛けた。最後に食器乾燥機のスイッチを回すのを忘れない。先刻飲みかけだったグラスは、ソファの前の小さなテーブルに、つまり愛のグラスの隣に置いたままである。2DKのこじんまりとした部屋に、隙間を埋めるように置かれた家具たちは、時間をかけて選んだ分だけどれも愛らしい。

悠はにこにこ満足げに微笑んでソファに腰を下ろす。それを、待ちくたびれた愛が不満げにぶうたれた顔で見つめるが、彼はそんなことは気にも留めず、相変わらず花でも愛でるみたいに眺める。そのことがまた愛の不満を助長するのだと、彼は解らない。氷が溶けて色のますます薄くなった彼のグラスの中身を見かねて、梅酒を注ぎ足す。氷をすめたら、やんわりと手で断られた。

「そういえばねえ、有紀が結婚するんだってさ」

「有紀ちゃんって、大学の同級生の？」

「うん」

しばし間を置いてから名前を確認した悠は、遅れて「へえー」と間延びした声を発した。

卒業してからも年に一度くらいは会っていた、比較的仲のいい友人だ。歳は一つ上のオフィスレディで、さらに五つ上の男性と、二年の交際の末結婚に至ったらしい。典型的と言えはその通りの、けれど愛にはどこか羨ましい報せだった。先々月ランチしたときには何も言っていなかった。うまくやってるの？ という質問に、いつもと変わらないさっぱりとした表情で、まあまあねと応えたくらい。もともとさばけた性格の友人だったが、物事とはこういうときに限って前兆のないものなのだと実感した。

しかし、まあ、それはそれ。あっけなく「へえー」で反応を終えた悠を横目で伺って、愛はちびちびと梅酒をすすった。もっと何某かのコメントがあってもいいんじゃないの？ と心中で唇を尖らしたい気持ちである。目の前で彼の意識と視線を奪っているテレビが憎らしい。彼女の遠く見つめる視線に気づいたわけではなく、CMに入ったタイミングでこちらを振り向く、その辛辣。ふてくされたままそこへ頭を預けると、迷いなく伸ばされた彼の左手が頭を撫でる。

「で、式には呼ばれた？」

「うん」

「そう、行ってらっしゃい」

思い出したように言葉を繋げる扱いの巧さが、なんとなく腹立たしいけれど、それに対して何も言うことのできない自分があるのも事実で。わずかに頭に回ったアルコールも助けてか、考えているのも馬鹿らしくなる。

結婚ってなんなのか。それをぐるぐると考えることで、今与えられているこの幸せよりも温かいものが手に入るのか。沢山の人を巻き込んで公にこの生活を縛ることと、今の自由な生活を天秤にかけたとき、それは果たしてどちらが幸せだと言えるのか。有紀から送られてきた招待状に描かれた金のフォントと、母の漬けた梅酒の緑が、錯綜してテレビの画面みたいに思考を麻痺させる。

結婚ってなんなのか。甚だ疑問だ。